

## 半分のにわとり

昔むかし、あるところにふたりの女の人がいました。ふたりはそれぞれよく似た<sup>に</sup>わとりを一羽ずつ飼<sup>か</sup>っていました。ところがあるとき、いっぼうのにわとりがいなくなっ  
てしまいました。ふたりの女の人は、のこった一羽のにわとりを自分のものだといは  
って、けんかを始めました。そしてしまいには、そのにわとりを半分に分けてしま  
いました。ふたりは、それぞれ半分のにわとりを飼うことにしたのです。

ある日のこと、いっぼうの女の人の半分のにわとりが、堆肥<sup>\*たいひ</sup>の上にあがってくちばし  
でほりかえしていると、お金のいっばいまったさいふを見つけました。そこへ、お金  
持ちのだんなが通りかかって、

「おい、そのお金、かしてくれないか。年のくれには返すから」といいました。半分の  
にわとりは、お金をかしてやりました。ところが、年のくれになっても、だんなはお金  
を返しに来ません。

半分のにわとりは、お金を返してもらいに、だんなのところへ出かけていきました。  
とちゅうで鳥のむれに会いました。鳥たちが、

「半分のにわとりくん、いったいどこへ行くんだい」とききました。半分のにわとりは、  
「お金を取りに、だんなのところへ行くのさ。いっしょに行くんなら、ぼくのおしりか  
らからだの中にもぐりこめよ」といいました。すると鳥たちは、にわとりのおしりから  
もぐりこみました。

しばらく行くと、おおかみのむれがやって来ました。おおかみたちが、

「半分のにわとりくん、いったいどこへ行くんだい」とききました。

「お金を取りに、だんなのところへ行くのさ。いっしょに行くんなら、ぼくのおしりか  
らもぐりこめよ」

そこでおおかみたちも、にわとりのおしりからもぐりこみました。

やがて池のほとりにやって来ました。池が、

「半分のにわとりくん、いったいどこへ行くんだい」とききました。

「お金を取りに、だんなのところへ行くのさ。いっしょに行くんなら、ぼくのおしりか  
らもぐりこめよ」

そこで池も、にわとりのおしりからもぐりこみました。

だんなの家に着くと、半分のにわとりは、

「ぼくのお金を返してくれ」といいました。だんなは心の中で、  
（お金なんか返すもんか。そうだ、こいつのおなかをはじけさせてやろう）と考えました。そして半分のにわとりをつかまえると、くだものいっぱいまった部屋にほうりこみました。

「それをぜんぶ食べたら、お金を返してやろう」

半分のにわとりは、夜になると、からだの中から鳥たちを出しました。鳥たちは、くだものをひとつのこらずぺろりとたいらげました。

夜が明けると、半分のにわとりがケッココーと鳴いたので、だんなはびっくりしました。

だんなは、

（今度こそやつつけてやる。そうだ、馬にふみころさせよう）と考えました。そして、半分のにわとりを、馬がいっぱいいる馬小屋にとじこめました。

半分のにわとりは、すぐにおおかみたちを出しました。おおかみたちは、馬を一頭のこらずぺろりとたいらげてしまいました。

朝になって、だんなが馬小屋に来てみると、半分のにわとりは、飼<sup>\*</sup>い葉おけの上でケッココーと鳴いていました。

だんなは、

（ようし。こんどこそやつつけてやる）と考えて、半分のにわとりを、あつくあったパンやきがまの中に放りこみました。半分のにわとりは、すぐに池を出しました。たちまち水がどンドンどンあふれだし、家じゅうが水びたしになりました。だんなは、

「やめてくれ、半分のにわとりくん。お金は返すから」とさげびました。

こうして、半分のにわとりは、お金を受けてって家に向かいました。池のあったところまで来ると池を放し、おおかみたちに出会ったところまで来るとおおかみたちを放し、鳥たちに出会ったところまで来ると鳥たちを放しました。それから、お金を持ってうちに帰りましたとき。

おしまい。

\* 堆肥 畑の作物などを育てるための肥料。ひりょう こやし

\* 飼い葉おけ 馬や牛に食べさせる草などを入れておくおけ

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界の民話14』関楠生／ぎょうせい